

法政大学学術機関リポジトリ

HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

〔最優秀賞受賞研究／論文部門（大学院生）〕 アルゼンチンの沖縄系下位世代による文化活動  
Ryukyu Sapukai を例にして

著者	月野 楓子
出版者	法政大学国際文化学部
雑誌名	異文化
巻	15
ページ	161-163
発行年	2014-04
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10114/9365">http://hdl.handle.net/10114/9365</a>

論文部門（大学院生）

## アルゼンチンの沖縄系下位世代による文化活動 — Ryukyu Sapukai を例にして —

国際文化研究科 今泉裕美子ゼミ  
月野 楓子

### 【報告要旨】

本報告では、南米・アルゼンチンで「島うた」をうたう Ryukyu Sapukai というグループを取り上げ、沖縄からの移民の子孫である沖縄系下位世代による文化活動について考察を行った。下位世代による文化活動は、一般的に親・祖父母等が沖縄出身であることから、沖縄文化の継承という文脈で説明されてきた。しかし、初期の移民から数えると 100 年以上が経過する中で、一世と、下位世代の沖縄文化の捉え方やこれをめぐる活動を同じに考えることができるのだろうか。

Ryukyu Sapukai は、留学や研修で沖縄に暮らした経験をもつアルゼンチンの沖縄系下位世代によって 2000 年に結成された。沖縄の楽器である三線を手に民謡などの「島うた」をうたうグループである。所謂「一世」は参加していないという特徴があり、年齢層は主に 20 代から 40 代で、週に一度、首都ブエノスアイレスにある沖縄県人連合会の会館で練習をしている。Ryukyu Sapukai のメンバーのような沖縄系の人々は現在、世界に約 36 万人いると言われ、移民先の日系人の中でもとりわけ沖縄独自の文化が保持されアイデンティティが強いと評価され、関心が寄せられてきた。こうした関心のもとで行われる海外沖縄系の文化にまつわる研究には大きく分けてふたつの特徴を見出すことができる。ひとつは、文化・芸能の活動そのものに関する研究で、「継承」や「変容」の様相に重点が置かれている。もうひと

つは、活動の担い手に関する研究で、彼らが活動に参加するのは沖縄系というアイデンティティを保有していることによるものとして主に説明されている。

アルゼンチンについては日系人のうち沖縄系が7割を占めるといわれているが、沖縄系を対象とした研究は他の中南米地域に比して著しく少ない。アルゼンチンでは沖縄系も日系も現地との「同化」がかなりの程度進んでいると認識されているため研究の対象となりにくかったと考えられるが、アルゼンチンのような状況に目を向けることこそ「同化」と「変容」の様相を検証し、実態を捉えていくことを可能にするだろう。

アルゼンチンへの日本人移民はその初期から他の中南米地域にみられたような開拓地への集団移住が無く、従って日系社会の形成は都市部で個別に生活を営む人々から出発した。現在では、一世には一般的であった職業も二世以下の世代では現地社会の一員としての教育と社会進出の機会を得て職業選択の幅が広がり、下位世代による県人会活動への継続的な参加者は限定的である。一方で、幼少期はほとんど県人会と関わりが無くても成長してから参加する者もあらわれ、こうした下位世代による昨今の文化活動参加については、マイノリティやエスニシティに対する理解への広がりによるところが大きいことが指摘されてきた。しかし、これらの概念が注目される中においても、アルゼンチン社会における生活の実態や海外沖縄系が「母県」に会する「世界のウチナーンチュ大会」に象徴される沖縄県からの働きかけ、加えて後に沖縄のイメージとして定着する様々なシンボルが沖縄ブームによって創出されていくことこそ、現在の移民社会や下位世代に影響を与えていったことを本報告では明らかにした。

Ryukyu Sapukai を通し、①そもそも彼らが活動に至るにはどう

いう背景が歴史的・現代的に見られるのか、②活動に参加している本人たちの意識はどういったものであるのかを分析しながら、③沖縄という「ルーツ」の自明性を問い直した。そこから下位世代による文化活動の捉え方について再検討を行い、彼らの活動が必ずしも「ルーツ」を基盤として直線的に行われているのではなく、活動こそが彼らの「ウチナーンチュ・アイデンティティ」を構築または再構成する過程ではないかと結論づけた。